

英国における大学セツルメント運動の立役者， チャノン・バーネット（その1）

山 口 信 治

〔抄 録〕

この研究ノートは産業革命の最中，英国の地に大学セツルメントを創設させた立役者，サムエル・バーネット（聖職名キャノン・バーネット）のなにがしらに迫ろうとするものである。生涯かれにつけられたニックネームは“半聖人”“半政治家”であった。しかし，筆者のそれは，この運動を暖め，仲間づくりを通じて進めていった背後に隠れているかれの人柄に，さらには，思想，理想，徳，健康，殊のほかその実践力（行動）といったものに興味をそそられる。むしろ，筆者は彼の“イノベーター”（innovator）であり，かつ彼のパーソナルインフルエンス（personal influence）に視点を定めてみたい。

キーワード 大学セツルメント運動

は じ め に

かつて『鷹陵』第80号（昭和53年仏教大学通信教育部出版物）に「海外研修近況報告」として，産業革命の華花々と対照的な貧困や犯罪，それにスラムなどの社会問題が台頭し，おおくの博愛主義者たちの目を開いた。その解決策を模索するなか1880年代，東ロンドンのまずしい労働者たちを相手に，友愛運動を開花させ見事に結実したのが“開かれた大学づくり”（Universities Extension Movement）の拠点，1884年東ロンドンに設立したトインビーホール（Toynbee Hall）である。その創設者でありかつ初代館長をつとめたのがキャノン・バーネット（Canon Barnett）であり，その紹介と人物像に迫るものである。

その後，たびたび大学セツルメントについて，またその立役者キャノン・バーネットについて触れる機会¹があったが，いずれも東ロンドンにおける大学セツルメント・トインビーホールを紹介しながら，キーパーソンのバーネットについては十分ふれることがなかった。

われわれ福祉の学を学ぶものにとって，このセツルメント研究はある向学心を満足させてくれるに十分な知的な座標軸をもっている。運動にいたった時代や思想，アイデア，その運動家

英国における大学セツルメント運動の立役者、チャノン・バーネット（その1）（山口信治）

たち、労働者教育の萌芽期からその後の発展、さらには諸外国への伝播、それに実際におこなわれた教育プログラムや諸事業などなど暇がない。がしかし、わが国で最初にこの運動を紹介した、大林宗嗣の著作『セツルメント研究』（大正15年（1926）東京同人社）をはじめ、その後次々に出版されたが、そのレビューから彼に関する詳しい紹介はなかったように思う。

そこで今回は、彼をピンポイントにより詳細かつ実証的な資料にもとずいて「研究ノート」として、点と点、点と線、さらには線から線へと未知なる間隙が埋められればとおもう。

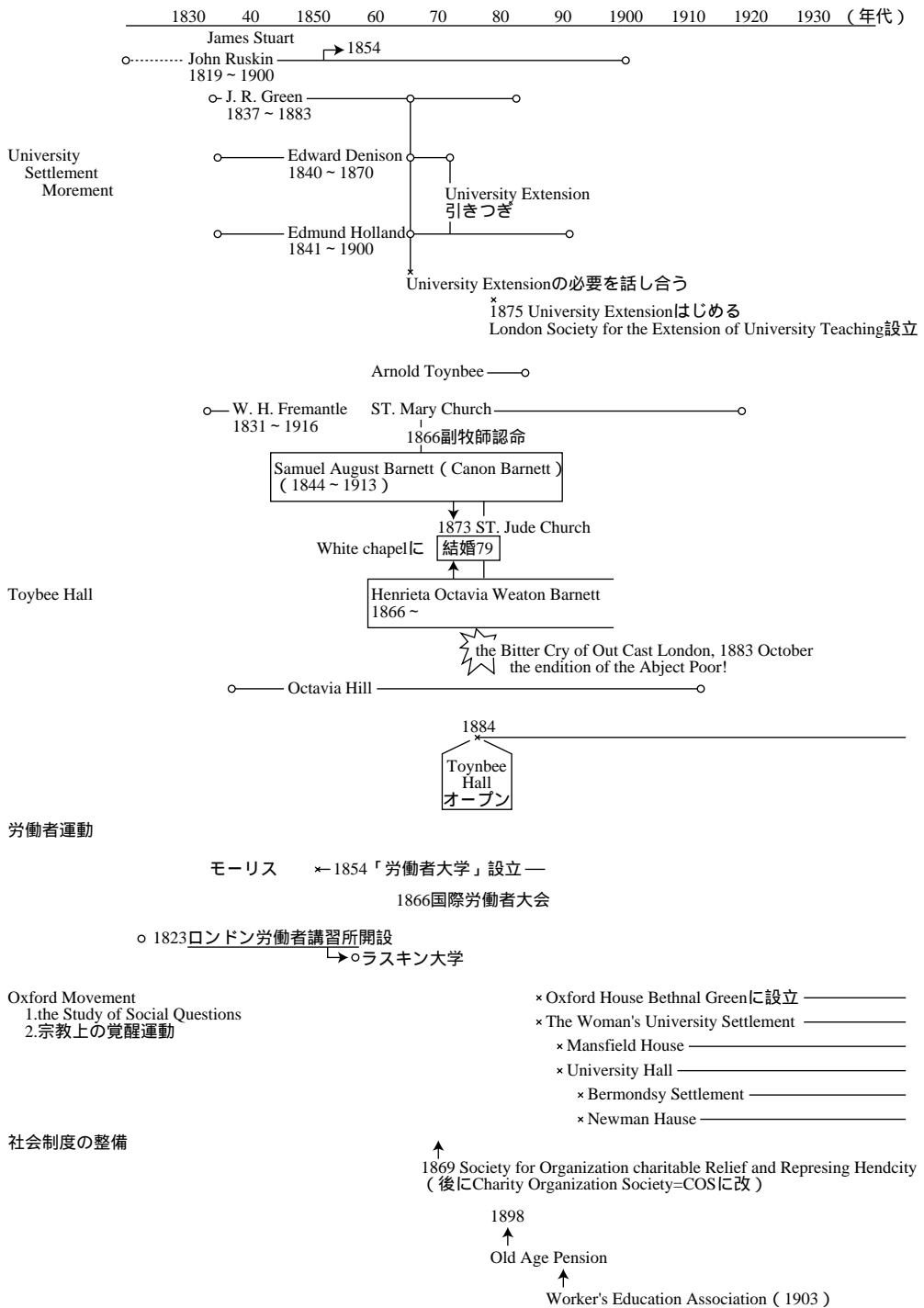
比較的あたらしいセツルメント研究者の1人、エミリー・K・エイブル（Emily K Abel）の結論によると、彼の性格はつぎのように整理されている。よく言えば、まず宗教家（敬虔なクリスチャン）であること、社会主義者（ソシアリズムの弟子=a postle）、行政的手腕家、リベラリスト、そして英国のトリーイズム（Toryism）の信奉者、そしてジャーナリストなどなど、また悪くいえば、ルーズな道徳熱心党などと。またエドワード・ハロルド・スペンサー（Edword Halold Spencer；80年代のトインビーホール^{レヂデント}の住人）をしていわしめれば“半聖徒（half Saint）”，“半政治家”（half statesman）ということになるが、いずれも的を得た整理とはいえない、むしろ今日流に言えばオピニオンリーダー（opinion leader）であり、かつイノベーター（innovater）としての再評価ができよう。ともかく1にも2にも、彼はトインビーホール（大学セツルメント）の創設者であり、かつその館長としてのチャノン・バーネットの役割がもっともふさわしいように思えてならない。以下大学セツルメントの創設者の足跡を迫ってみることにする。

1

まず彼の彼たるサムシングを知る手がかりはとは、『トインビーホール・年次報告』（Toynbee Hall, Annual Reports）をはじめ『トインビー記録』（The Toynbee Record）その他書簡ならびにおおくの通信類（手紙）、とくにクイン・メアリ大学（Queen Mary College, University of London.）でトインビー・ホールの研究をしたエミリー・エイブル（Emily Abel）の資料に負うところ大である。そのほか著書の中には、彼の妻ヘンリエタ（Henritta）による『チャノン・バーネット；彼の生涯・業績・友人たち』（Canon Barnett ;[His Life, Work, and Friends]（Boston, 1919）『チャノン・バーネット』（Canon Barnett（1）, 1921.）や、アイトケン（W. F. Aitken）著『Thirty Years in the East End—A Marvellous Story of Mission Work』（1906）などが手ごろな文献となろう。

2

本名、サムエル・オウガスト・バーネット（Samuel August Barnett）、彼の誕生や死亡、その出生地については、大方の書物で扱われており、さらにけ加えるなんら目新しいものはな



備考

James Stuart : Univ. Ext . のパイオニア
TR Green : 「Short Story of England People」1877
Edward Denison : 大学セツルメントのアイデアのパイオニア
3 者 (TR Green, Edward Denison, Edmund Holland) 東ロンドンステッニーのデンマーク丘の集まり
University Extension の必要を協議, 設立に向けて準備
(Brook Lan bord 「Contemporary Review」1884/4
Arnold Toynbee : historian/the Industrial Revolution (妻の手による出版)
“Apostle Saint” の名をつけられた (Picht 「Toynbee Hall of the Settlement Movement」p 22 ~
Canon Barnett : “ half Saint ” “ half Statesman ”
Toynbee Hall (University Settlement の創設者 / 館長)

O. Hill 「Homes for the London Poor」1875
住宅改善運動, Lady Rents Collector 組織
Oxford, Kenbridge 両大の学生による募金活動はじまる
「Toynbee Hall」は Arnold Toynbee を記念して命名
“ fruits of this fellowship of friendship ”

図1 年表

い。ただ思想のみならず運動〔活動〕に至った過程を知る上で少し興味あることは、その時代であり、その環境、出生地や家族、その後の学びの場で知りえた師や友人たちではなかろうか。だれの影響がその後の運動にどうかかわったのか、そこが知りたいところでもある。

まず、その暦年は1844年2月8日ブリストール(Bristol 英国西南部) に生まれ、死亡は1913年6月、ホーブ (Hove) である。その間彼の立ち居振る舞いに強力な影響を与えたのは、その人、フランシス・オウガタス・バーネット = 父親 (鉄鋼業を営む) であろう。かれは頑強な保守主義者でその息子として生れ、多くの時期を家庭で過ごした。残念ながら、家庭での母親との関係や母親の影響などについては記述がなくよくわからない。さらにどんな遊び仲間がいたのかなど全く知る由がない。ただ唯一、幼年期父親と同行したアイルランドへの旅行記録が残っている⁽²⁾。それによるとまず町の様子が、“これは決してうつくしい町並みではなかった”。むしろ異様な町として心に残ったようだ。その異様さは「長くとどまっていられないくらい暗い光景だった」として。これまで見たことがないホラブルな町、そしてその迷路のようにはりめぐらされた通路に。その上その住人たちの貧しさに驚いた。この原風景はおそらく生涯をかけて改善運動にかけた熱情なエネルギーを知る手がかりとなることは間違いないだろう。

くわえて、彼の運動の原動力になったのは大学における教育課程であろう。1862年、18歳でオックスホードのワドハム校 (Wadham) に入学する。妻の証言によると、この大学への進学は家の期待すなはち父親のそれであり、父親の選択だった。つまり保守主義 (Toryism) 教育と福音宣伝者 (伝道師) の2つの道⁽³⁾を身につけさせる以外のなにものでもなかった。彼はのちに当時を振り返って、“生涯の栄光ある時代だった”と記しているが、反面なんらドラマチックで合いのなどないごく単調な大学時代であったこと、また特記すべき生涯、ながく付き合うことのできるような友人など、さらにはこれといった社会団体への参加や関わりなどもつ

こともなかったと語っている。

3

やがて、彼の生涯にある転換期を迎える。大学時代すこしも疑問をもたなかったトーリー主義への疑問であった。1865年、卒業後ただちに公立学校の教師となるが、この経験はその後トインビーホールを立ち上げ、具体的な教育カリキュラムを展開する際、モデルとなったピクトリア朝時代の、そして中産階級のそれをモデルだったし教育内容や教育施設であったことは否めない。さらにこの間(1867年)、アメリカ(市民戦争後)に渡航9ヶ月ニューヨークに滞在している。10数年後ニューヨークに息子を旅行させる際実兄に許可(書)をおくっているが、その手紙⁴からも読みとることができるのは、社会改良家が身につけるものは外国の事情を熟知すること、語学研修はもちろんだが、それ以上に社会的な問題や関心にあることを力説している。即ち「それを知らないで社会改良者になることは論外だ」とまで主張する。事実このアメリカ旅行で見聞きしたことは、これまで育ってきた家庭環境の、とりわけ父親から受けた保守主義やトーリー主義の空気が見事に打ち砕かれたからだろう。さましく彼にとってカルチャーショックだった。

この旅をするまでは、アメリカの旅はどの町にいても、ホテルの食事にせよ、その他あらゆるサービスが行きとどいていて快適なたびができることを期待していた。

まさに想像通り、船旅は順調にバルテモア(Baltimore)に向かって出船した。ところが到着後快適とはいえないあるホテル(Eutaw House)に31ポンド払って滞在することになる。ゲエントルマン・パーラーというゲエントルマン専用の居間が用意されていて利用することができたが、そこに滞在している数ヶ月の間にいろいろと不平がでてきた。第一、そのホテルに住み着いた太った動物(種類は不明)のその不気味さ、そして建物の下品さ、おまけに料理のまずさ。とくに肉のまずさがたまらなかったようだ。ついに「滞在中、ホテルでの夕食に満足するものがなかった」とさえ書き留めている程だ。その他、床屋のサービスの低さも然り、おまけに、観光ガイド嬢の身つくろい1つ見ても、その着こなしの下手さなど枚挙に暇がない。ただ1つ、“目からうろこ”,ある慈善家に案内されたニューヨークでの不良住宅街(スラム)の見物が書残している。その町の建築物やレイアウト、特に街路樹が全く手をいれられず荒れ放題に放置されている様、それらがなんら社会の問題(social questions)にもならないという意識の低さなど若い青年バーネットのこころを痛めたと書き残されている。また少々金持ちの連中がいたが、物笑いの対象だったり、人々から恐れられたりしていたとか。独特の慈善観をもった者や、その地区の人格形成への悪影響を力説するもの、かれらの確信にみちた意見など詳細に書きとめている。

総じて旅のはじめから終わりまで、これまで抱いていたトーリー主義やその社会的特権の保

英国における大学セツルメント運動の立役者、チャノン・バーネット（その1）（山口信治）

持という考え方は捨て切れなかった。また奴隷制に対する偏見についても疑問視するようになり、半面つねに寛大さと自由、それに南部で元奴隷を囲っていた所有者たちのもつ弁解がましい呵責などにも心をいためている。バーネット自身はその南の暴力や恐怖といった考え方には賛同できなかったし、結局、南の貴族主義的が自分のもつトーリの主張やジェントルマン理想とはおおいに異なるものだ^と結論つけたようだ。とはいえ、彼の考え方が単なる北の平等思想や民主主義の理念に倣ったものでもない。ニューヨークでみたアイルランド人給仕たちのアメリカに溶け込んでいる様子など“過剰でしかも独立した雰囲気”と。さらには国や政府の失態とその無策さがり、それに人が属する共同体によって行動の様式など拘束されかつ変えられている事実などを見るにつけ、これまでの自分の思想とこの急進的な弁護者たちとの間に相容れないものがあることがはっきり認識するようになったこと。またその後のかれの発想や活動のベースに、すべての人に選挙権とその義務の存するという市民意識のめざめにあった。もちろん“一般にいわれていた民主党の落ち着きと平静さを売り物”というキャッチフレーズにも同意できなかったようだが、10年後バーネットの行動理念である異なる階級間との接触について1つが予見されたと推察される。

4

次に旅行中いくつか目にした人種偏見についての見方にもふれておこう。まずボストン高等学校を訪ねているが、そこで見たものは異なる階級間の混合だった。またその話し合いの現場に同席でき、そこに見られた新鮮な議論の場、殊の外実際に教育の場での“話し合い”という問題解決の1方法は、その後の彼の英国における貧困者らの生活改善や、“人との人格的接触”を読み取るのに十分である。すくなくとも公立学校におけるジェントルマン教育やその人格の形成には欠くこのできない要素だと理解したことは間違いない。またオタワでの発見は言い古された階級間の仲良し（familiarity）の工夫ではなく、真にして、かつ自由な交わり（free intercourse）”という信条に新鮮でかつ感動を覚えた^と記し、その後の彼の実践におおきな勇気を得たに違いない。以上米国の旅行で得たことは、その後の氏の実践や行動の原動力となり、かつその影響はきわめて大であったといえる。まさにエポックメイキングとなった。

さらに第2のエポックメイキングは、“アメリカの人種偏見”である。パルテモアでの学校見学の際、ある教師の考えや意見に賛同している。というのは黒人やそのこどもたちの教育、殊の外教育による改善の難かしさを記している。ホテルでの黒人給仕たちの立ち居振る舞いは、まるで“動物（animal）”だし、体を動かして働こうとしない様子などはまるで“空虚”というほかなかったとまで言及している。さらに黒人のこどもたちの外観をみて、これまでの考え方をかえるにいたったほどだ。彼らのそのきたなさ（身体的な不潔さ）に加えて、その独特の体臭に特別な差別や偏見の感情を抱いてしまったとある。同時に急ぐそれらは大半、顔や手

足を石鹸で洗うということで解決できるし、また石鹸をかう金銭や石鹸をつかう教育によって解決できるもので、決して偏見という解決策でないことを確信するに至った。たとえばフロリダのこどもたちにしても、多くのこどもたちは明るくてユーモアで人柄もいい。他にニューオリンズのこどもたちには知性の高さと顔の輝きに驚嘆したと感想をつづっている。

5

彼のエポックメイキングは、旅行を終えて帰国した1867年12月22日にある。それはセントユダ教会の牧師、フレメントル(RWH Fremmentle)氏から副牧師として招聘を受けたことである。この教会所在地ブライアンストン通りは、2年後フレメントルによってこの地区で最初の地区委員会⁽⁵⁾(後のCOS 慈善組織協会)が組織されたところだし、したってその彼との出会いや、こうしたビクトリアン時期の社会的経済的な思想を実現するための実験地にバーネット氏が同席できたこと。さらにはこの試みはそれまでの旧い救貧法による施与や慈善(“ほどこし”; 貧民へ無差別に与える慈善)ではなく、あたらしく組織した協会(COS)によって種々の弊害や無差別のほどこしを防ごうとするものであった。まず貧困者のニードを調査すること、それに応じた援助を分類することからはじめ、彼らに自活の道を支援し、かつ保障しようとするアイデアが取り入れられることで評価できる改善の途を招いたといつてよからう。早速フレメントルは教区の基金をもちいて2つの委員会を支援した。その1つの委員会の連絡役を引き受けたのがオクタビア・ヒル女史(Octavia Hill)であった。彼女の特性はその意思のつよさと行動力であり、手始めに市内(メアリーボン)の空き地を買いもとめ、それをこの地区のまずしい労働者たちの密集地やスラム街の貧民たちに貸しあたえようとする住宅の建設計画のキャ



写真1

Honrieta Octavia Barnett (左), Samuel August Barnett (Canon Barnett = 右)(Elliott and Fry)

英国における大学セツルメント運動の立役者、チャノン・バーネット（その1）（山口信治）

ンペーンであった。それに加えて女性による家賃の集金人（レントコレクター）制度を採用したことである。これには一定の期間教育をうけて単なる集金人としてではなく、その人格的な接触＝まじわりを介してあたえたり受けたりできる友情や感化、また生活の悪癖を改善していこうとする一石二鳥の策であった。いってみればタテマエはテナントから賃貸料をとる仕組みだが、ホンネはかれらとの接触を通じて得られるモラルや自覚といった道徳心の向上をねらったものでもある。同時にこれは60年時代の“個人主義”やその後におこる“社会改良”のさきがけとっていいだろうし、後に彼女をして“ただしい洞察力をもった改革者”としての高い評価されたところでもある。

こうした数年バーネット氏のメカリーボーン地区でO・ヒル女史との密接な活動をともに出来たことは大きなエポックメイキングとなった。さらなるものは、生涯最大とも言えるキーパーソンとの出会いである。その人こそ生涯を伴にしたヘンリッタ（Henrietta Octavia Weaton Barnett）夫人との邂逅である。

6

1856年、クレリイハム（Clapham）の裕福な家庭の子としてうまれた。長じ、若い時からO・ヒルのレントコレクターとしてボランティア活動に参加していた。ミランダ・ヒル（ヒル女史の姉妹）がドラント夫人に出した手紙に彼女について触れている。救貧事業にかかわりをもった女性であること、その傲慢さや人を区分けをする、たとえば“ある連中”などと多少の軽蔑した表現だとか“労働者たちの汗をすいとる雇用者”、や“スラムのご主人たち”、“ユダヤ人”それに“ユダヤ教の異邦人”や“ユダヤ教の平和主義者”などなどふるった表現法を用いる。それに反してトインビーホールの住人^{レヂデント}たちも彼女を“おおげさな預言者的なセンスの持ち主”と評し彼女独特の正義感や多少霹靂しながらも彼女の決断力やエネルギーに一定の敬意と評価を表していた。

1875年には最初の女性の救貧法の委員に、75年から97年までは地区の学校のマネージャーとして、84年には救貧法の学校の改善委員として、さらに州のこども支援協会のセクレタリーなどなど実にエネルギーあふれた人物であった。このほか郊外に学校を立てたり、感化院の収容者を訪問してその教化事業にも手をだしたり、ワークハウスの少女たちを家政婦として訓練し、安定した自立した生活ができるよう支援したことなど。それに欠かせないのが夫、バーネットのよき牽引車の役目を果たしたこと、また時にはいろいろな計画のよき立案者やアドバイザー、企画者、実践者として、殊の外ロンドン郊外のハンプシア公園づくりには遺憾なく手腕を発揮した人物とっていい。1917年、それらが認められてO. B. E. に、また1924年には“Dame of the Order”を創設した功績などなど生涯通じて彼女の評価はまさに“宗教人”であり、かつ夫にとっても隣人にとっても“もっとも温厚で尊敬できる人物”とし

て後まで高く評価された人物であった。

7

結婚1月後、最大のエポックメイキングを迎えるが、ロンドンの“最悪のスラム街”といわれたホワイトチャペル(White chapel)に赴任することだった。もちろん正規の牧師としてだが、多少の不安はかくし切れなかったようだ。後に友人のホーランド(Edmund Holland)らにこの様子を手紙に書いて送っている。むろんかれは1869年、ステップニー(Stepney)にデニソンのすすめで法律家として住んで生活したことのある人物だし、また時のロンドン司教、ジャクソン(Jackson)博士らに直接相談⁶⁾をもちかけてもいた。もとよりジャクソン氏もホワイトチャペルでの牧師を経験しており、その牧師(職)の空席をバーネット氏にと相談をもちかけた人物でもある。父親のような親しみでつづられた手紙には、若いバーネットに“この異邦の地への依頼について決定を急がないように”とまた、ホワイトチャペルでの無差別の施しの実情を訴え自分が一番恐れていた犯罪者たちの多く住む居住区だがその反面やりがい(懸命な教区民への愛の奉仕活動への誘い、犯罪者に対する強化事業、貧困者の生活改善や人類の平等などなど)のある魅力ある伝道地でもあること”を書き沿いてあった。教会は地区のほぼ中心にあり、その周辺にロッジ風の家が立ち並び、住民のおおくは慈善でくらしている。教会員のなかには車夫などして経済的に自立できたものもいたがその数は僅かだ。改良を必要とする者たちは“ピンポイント”だと嘆いている。もちろん統計資料(1870年代)では、人口7万6千人あまり⁷⁾、うち3500人は救貧法の援助をうけて自活できる程度の住人たち、また商いをして生計をたてている裕福なユダヤ人が6000人⁸⁾程度いること。しかし牧界の霊的必要を満たす聖ユダ教会に牧師が不在なこと、とにもかくにもこの地区のデータから“ロンドン1の貧困者の多出地域”という烙印^{ラベル}がおされていることがロンドン人にある種の恐怖感とイーストエンド(East End)を与えていたことは否めない。さらに1873年発刊の『ホワイトチャペル医療報告書』⁹⁾によると、この地区の5分の1の子供たちが1歳未満で死亡していること。また3分の1は5歳未満でそれぞれ死亡しているという報告がある。とくにホワイトチャペル(聖ユダ教会の教区)での死亡率は高く6.1%¹⁰⁾、しかもその多くは5歳以下の死亡となっている。原因はまずしい住宅事情にあると。同報告者は聖ユダ教会からすこし離れたゴールストン(Goulston)で一部屋(12×9×7フィート)に男性1人、女性6名、そしてこども3人、計10人が寝起きをしているというあまりの過密ぶりを報告¹¹⁾(1871年)しているくらいだ。また1891年、人口の44%のものはワンルームの賃貸し部屋の生活者たちだった。しかも例の改良家チャールスブース(Charles Booth)が1889年、この地で調査したとき、住人のおおよそ40%¹²⁾のものが、いわゆる“貧困レベル(poverty line)以下であることを報告して驚嘆している。もちろんバーネット氏も博愛主義者としてまた一人のジャーナリストとして聖ユダ教

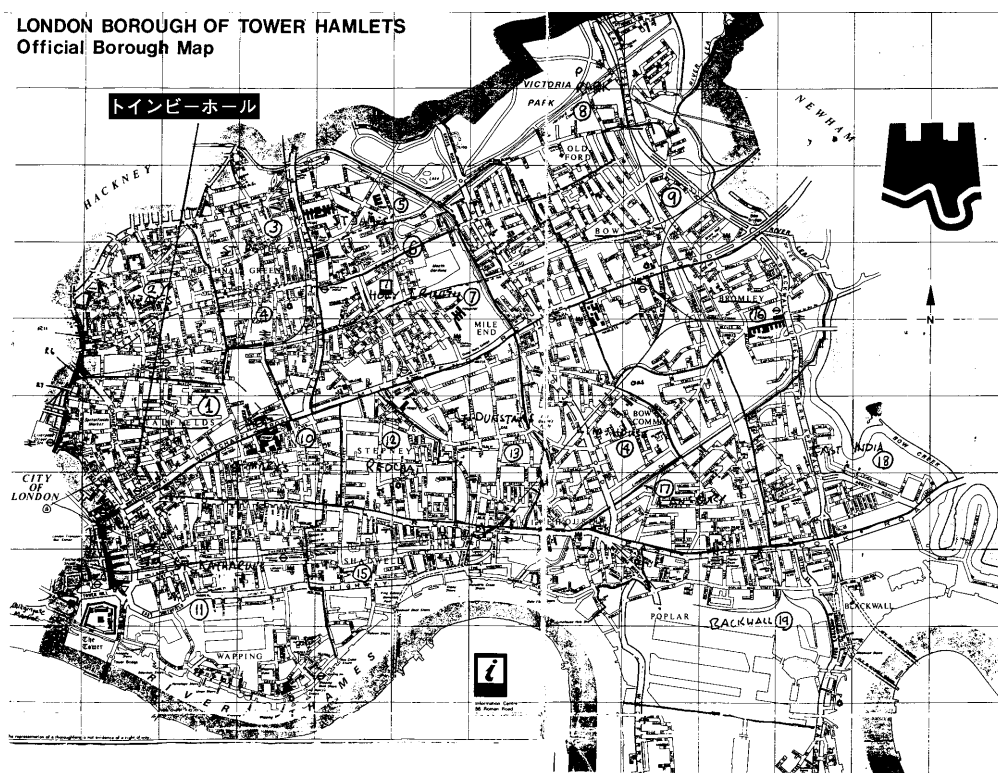


図2 東ロンドン

会に赴任した当時、この地区、東ロンドンがまるで裸にされたような、“脅威や不備”で満ちていたと。たとえば診療所にしても、洗濯場や学校、それに図書館にして然り、社会事業にしても同様。いわんやイーストエンド（East End）が早くから大学を卒業した社会改良家たちの改善運動の拠点となっていたが、1872年バーネット氏がここに移り住んで活動をはじめたのはまさに最悪の常軌を逸した時期にスタートしたことになる。

そこでバーネット牧師のこの地での活動の目標はまず教会員を教会に出席させることであった。もとよりこの地はロンドンの品格のなさ、クラス（階級）間の物理的遊離、強力な社会的運動の欠如等々があり、これらが後に彼をしてトインビーホールを設立を思い立たせる動機となったことは間違いない事実であろう。そこでまずトインビーホールのアイデアは宗教による力の発揮であった。そうした周辺には1880年、イーストロンドンの司祭ワルシャム・ハウ（Walsham How）は教会員と異質なクラスとの調和は“人格的触媒”の必要にあることを⁽¹³⁾を説き、社会問題の解決とかれらのニード答えるためその責任を痛感し、すでに1870年代組織された「教会改革ユニオン」⁽¹⁴⁾の会員として飛び込んできていた。

さらにユニオンでバーネット氏はヒリップ・L・ゲル（Philip Lyttlton Gell、インビホール初代議長）やTH・グリーン（TH Green）アーノルド・トインビー（Arnold Toynbee）らこの2人は

大学セツルメントの基礎作りに大きな影響をあえたばかりか、その強力な資金面での助っ人でもあった。少なくとも彼らの著作活動を通じて、徐々に貧困問題に対する国の無策や盲目性に専門集団としてメスをいれるようになっていった。

8

聖ユダ教会での牧師としての第1の仕事は“モデルになるような人の生き方”を示すことであった。次に山積する教会の問題のうち死に掛けている教会の状態を回復させることにあった。まず日曜礼拝を復活すること、その他、こどもの集会、コンサート楽団の組織、モーリス(William Morris)ら芸術家の教会でのその作品の展示の実現、さらには聖歌隊の再編したり教会学校の再建⁽¹⁵⁾、そのほか住民のための快適な住宅の提供、衛生的な改革、さしずめ急がれた図書館の建築はじめ、運動施設や洗濯場、健康的な食事給食などなどの提供、優先順位の高い問題へ果敢に挑戦せねばならなかっただろう。手はじめに彼は救貧員としてホワイトチャペルの委員としてその働きをはじめた。つぎに若い女性たちの家政婦養成、衛生法やこどもの休日活動のための基金あつめ、さしずめ急務のクラス間の“まじわり”とかれらのニードにこたえるため教会図書館の開放から、定期的な絵画の展示会、大学延長講義のたち上げる作業への取り組み、1883年に結成した「ラナ少年会」には85名を擁した団体や180名からなる大集団の「男子クラブ」などへの資金援助まで多彩な事業をきわめて精力的にはじめた。その結果隣の地区エウストエンドからも人々があつまるようになりよき交流が開始された。他方、教会でも会員を組織して地方の教会を訪問したり、ときには地方の大富豪の家庭の見学会など企画し、徐々にトインビーホールの初期の基礎的活動が展開できるようになっていった。



写真2

1855 館長並びに館長婦人(2段中央)とレジデントたち
London stereoscopic and photographic Company

英国における大学セツルメント運動の立役者、チャノン・バーネット（その1）（山口信治）

2つは、O・ヒルとのCOSの働きやその理想を実現するための密接な連携と協力をすすめる、彼女と働いていた2年間に、バーネット氏はホワイトチャペルの聖ユダ教会の近くに、しかも友人らの支援をうけられる近い所に、古い住宅を手に入れ労働者の賃貸住宅をはじめた。しかもボランティアの女性集金人を養成、のちに東ロンドンの住宅供給会社の設立に尽力した。

第3はO・ヒル女史は独自の住宅改良運動を支援してきたが、そのモデルやガイドラインは、健康的でしかも快適な住宅をめざすという1項からつけ加えられていたことだ。基本的には上下水を別にする、できれば飲み水をもちはこばなくてすむシステムを工夫、下水の処理や排水設備など、また各部屋から使える水の施設などいろいろの改良が加えられ、これらを完備した住宅としてカサリンドックに5階建てでしかもワンルーム型の“細胞タイプのアパートメント”が建設された。

第4のバオネットが聖ユダ教会の正牧師となり名をキャノン・バーネットと改名。この時期のかれの活動には変化があり、多様かつ多忙きわまりない日々をおくが、大学セツルメントを立ち上げソフトランディングさせる準備をおこたりなくしたと言ってよい。その役割は大であったと言える。そして1884年たちあげたばかりのトインビーホールの初代の館長としての責務をつとめる。

9

以上ホワイトチャペルでの彼の仕事を概括してみたが、一定それらのスタートと事業に対して評価の反面、力量からして決して満足すべきものでない自己批判を加えているのも彼の特性の一つである。

かくて1878年ごろ、こうした彼のアイデアやその運動またそれもとずく数々の改良事業は1つのモデルとして国内はもとより地方それに海をこえて諸外国にまで拡散していった。

2年後彼は東ロンドンに新地をめざして赴任してくるが、決意の最大の理由は、そこに住む教区の教会員たちの絶大な歓迎があった。それから9年後大きな希望と期待をもってホワイトチャペル身を寄せることになったが、遣り残した計画や事業についていくつかあげて悔いている、たとえば教会サービスや改良事業の具体的な問題解決の手法などなどがあった。これはまさしくフレメントル師が忠告したように、牧師1人の力量に限界があり、総じて東ロンドンでは牧師たちの数が圧倒的に少なかったことに関係してくる。

10

トインビーホールの基礎を物語る第1場は、O・ヒル女史と彼との接触・協力・連携（ネッ

トワーキング)と効果について触れることである。その1つは、労働者のための住宅供給。つまりO・ヒルが立役者だが、彼女はパーネットに関心をもち、彼の教会での奉仕や使命に、まず教会報告や説教集に目を通した。日曜サービス(説教)などなどチェックして、その資質や能力を見定めた。それは彼女が管理していた基金を使うか否かを決定するためのものであった。他方パーネットも彼女の力量や手腕、才能、能力などを知りたかったし、なによりも彼の理想を実現するための資質に富むか否かを見極めるものだった。こうしたテスト期間は1874年双方に合意ができて、彼女はパーネットの教会活動に参加するように、また彼女も資金の協力を願っている。はじめにまずパーネット氏の活動費の値上げを提案して受け入れられた。その他社会改良のアイデア、さらにボランティアに名を連ね正式の働き人になった。こうしてお互いにかげがえのない助っ人として認め合っていた。殊の外、パーネットの初期の仕事には彼女のインスピレーションとその豊かなアイデアが、ここでの理想を実現させるため欠せなかったし、なによりもそれを強力に推進する力をもっていた手腕が買われたといつてよい。

早速パーネット氏はウエントワース(Wentworth Street 聖ユダ教会の近く、その上仲間たちの助けがすぐ得られるところ)に古い建物を手に入れ、特別に訓練(感化)された女性ボランティアたちが組織された。彼女たちはただの集金人ではなく、“隣人づくり”運動の担い手としての役割をもった専門化であった。こうして「イーストエンド賃貸会社」をロンドンで始めて、O・ヒルの手によって1883年に開設させることになった。なおこの会社の存在は1890年代を通じておおきな働きをなしとげたことを付記しておく。

ところでこの住宅にはいくつかの特徴がある、その1つは住宅を提供するものたちの意思ではなく、利用者つまり低労働者たちのニードを第一に考えたこと、さらにはかれらのニードを満たすものであった。当然スラム一掃事業(市の住宅一掃委員会)によって住む家をおわれた



写真3

Mammon's rents-1883. ('Bitter Cry of Out Cast London')
Reproduced by permission of the proprietors of 'Punch'

英国における大学セツルメント運動の立役者、チャノン・バーネット（その1）（山口信治）

ものたちに用意されるもので、多少住宅供給事業を実施していたピーボディ・トラスト（Peabody Trust）の住宅にくらべて狭さの劣るところがあるが、快適さでは少しも劣るところがないとO・ヒル女史は誇りをもっていたものである。のちにバーネットが書きのこしたものであると、ドック（港）で働くその日暮らしの未熟練労働者に建てたもので大勢の者が利用していたことがわかる。

その2つは、賃貸アパートの建築にあたり、建築材など細かい指示をまとめたガイドラインをO・ヒルが用意していた。そのなかで最も注目するのは、上下水の問題とその改良でとくに排水に気がついた点があげられる。後日これらの設備がたかい評価をうけることになったが、いずれにしても利用者の目線で建築がなされたという、この点は特記しておいていいところであろう。もちろんここで養われたノウハオは後のトインビーホールなどおおくの建設に活かされた。

3つめは、その貸し料をあつめる集金人たちとその組織化であろう。さきに示したように単なる徴集人ではない、そうした仕事を通じて“よき隣人づくり”人との接触による感化（力）に力を注いだ。しかもその影響力をもって生活を改善させていこうとするアイデアこそ、これがバーネットの改革への理念と実践への応用だった。未熟練労働者たちのモラリティ（道徳心）を向上させる道はただ1つこの人格的接触による“よき感化力”以外にないということを力説して止まなかった。その効用について、徴収者の1人マーガレット・ネビンソン（Margaret Nevinston）やビートライス・ポーター（Beatrice Potter）、さらにO・ヒル女史によって訓練を受けたケイト（sister Kate）姉妹などなど、このアイデア、つまり人との接触とその感化による生活改善に共感し同時に高い評価を与えたものたちであった。

11

つぎにホワイトチャペルにおけるトインビーホールの基礎の第2場、たいしたクライマックスらしきものはなかったが、バーネットの聖ヨハネ大学（オックスホド）での大学セツルメントについての報告会をかねた講演会であろう。トインビーホール開設1年前のことである、さらに1893年の春、バーネット氏がブリストルのキャノン（Canon of Bristol；聖徒の名列）となり、以後呼び名をキャノン・バーネットと改めて呼ぶようになるが。この間、妻の弁によると、彼の胸中にはホワイトチャペルにおける大学セツルメントの役割について、おおくの新しくかつ興味ある社会改良のプロジェクトを暖めていたようだ。その実現のため引き続き館長職を続行するが、セツルメント事業の実績はあがらず、十分活動のできなかった時期もあった。

死ぬまえもう一度ホワイトチャペルを訪ねているが、これまで取り組んだ事業や思い出していた。思いひとしおだったと思うが。トインビー・ホールやその他の施設や機関を見てまわっ

たと言われている。この後1913年6月7日、ホーブ(Hove)にて死亡。波乱に満ちた彼の人生に幕を閉じることになったが、終始“トインピホールの館長”“大学セツルメントの創設者、その功労者”として評価は高く、その栄誉がたたえられ今日ウエストミンスター寺院に眠っている。

〔注〕

- (1) 山口信治「東部ロンドンにおける大学セツルメント活動」(『社会学部論叢』第15号) 佛教大学学会 1981.
山口信治「移住民受容に関する研究ノート」(『社会学部論叢』第14号) 佛教大学学会 1980.
山口信治「どろ沼に咲いた英国博愛主義とその人たち」(佛教大学通信教育学部テキスト)
山口信治「Stebb's Hyth - プリグリムの記」(『鷹陵』)
- (2) SAB, Dialy of Journey to Ireland, Barnett Papers.
- (3) HOB, Canon Barnett, His Life Work and Friends, London. 1919, p. 9.
- (4) ST, Barnett, Jounal of Trip to America (6 April 1867 ~ 13 July 1867).
- (5) Lyndock Gardiner, Relief: Utilization of Voluntary Efforts, Appendix No 13.
Third Annual Report of Local Government Board, 1873-74.
O/Hill to WF Fremmentle, 1 nov. 1876.
Collection of Letters from O/hill to SA, Barnett.
LSE: O/Hill, Relief: Official and Volunteer Agencies: Administering. Appendix No 12.
- (6) J/Jackson to SAB, 27 Nov 1872, Barnett Paper.
- (7) HO Barnett, Barnett.!, p. 68.
- (8) White Chapel Union, Report of the Guardians and Abstract of Union Accounts of Year Ended. March 1911.
- (9) Henry Jephson, The Sanitary Evolution of London. 1907, pp. 278 ~ 79.
- (10) Op cit. 279.
- (11) Op cit. 243.
- (12) Charles Booth, (ed) Labour and Life of the People, vol, 1, east London, 1889, p. 36.
- (13) Walsham How, Church Congress Report, 1880, pp. 94 ~ 95.
Quoted in KS Inglis, Church and the Working Class in Victorian English 1963, p. 323.
- (14) Leaflets of National Church Reform Union. 1880 ~ 1895. PL. Gell to SAB, 1 Dec. 1880.
Arnold Toynbee to SAB, 19 Jan. 1879, 2 Feb, 1879. 18 June 1879, Barnett Paper.
- (15) SAB to FGB, 6. May 1893, 15 Nov. 1889.

〔余 滴〕

これですべてキャノンバーネットについて網羅できたとは思えない。むしろ残した足跡が多い。たとえば(1)彼の政治家たる「問題と政治的解決」,(2) Building of Thelema。これはアシュビー(Ash-bee)の書いた小説の題であるが、この中にバーネットを知る足跡や記録が、特に彼を“Rev. Simeon Flux”として登場させて物語るそのストーリーに興味がわく。最後は足跡を理解する「同情」(sympathy)や egolitarism をもたらず経緯がいま1不明であり次回にふれてみようと思う。

(やまぐち しんじ 応用社会学科)
2002年10月16日受理